

「電車の中の居眠り」
車内空間とジェンダーを考察する
ブリギッテ・シテータ博士（英国ケンブリッジ大学教授）

21世紀アジア学会大会 特別講演
平成29年1月28日

Dr. Brigitte Steger

(University of Cambridge, U.K.)

【略歴】

オーストリア生まれ。ウィーン大学で『日本の眠りの文化的・社会的考察』について博士号を取得。現在、ケンブリッジ大学東アジア研究所の教授として、日本の日常生活を研究。「居眠り」という言葉・概念を国際的に紹介した。近年は東日本大震災で被災した岩手県山田町の人々とともに避難所で暮らし、聞き取り調査も行っている。

【主な著書】

- ・『東日本大震災の人類学：津波、原発事故と被災者たちの「その後」』（人文書院、2013年）
- ・『世界が認めたニッポンの居眠り：通勤電車のウトウトにも意味があった』（CCCmedia、2013年）
- ・“Japanese historic ‘timescapes’: An anthropological approach,” *KronoScope* 17 (2017), 37-60.
- ・ *Manga girl seeks herbivore boy. Studying Japanese gender at Cambridge* (LIT, 2013).
- ・ *Worlds of sleep* (Frank & Timme, 2008).
- ・ *(Keine) Zeit zum Schlafen? Kulturhistorische und sozialanthropologische Erkundungen japanischer Schlafgewohnheiten* (LIT, 2004).
- ・ *Night-time and sleep in Asia and the West: Exploring the dark side of life* (Routledge, 2003).



日本は安全な国ですから

ぼくが世界中を旅した経験から言うと、日本の女性が一番車内でよく眠っている。これはいかに日本の治安がいいのかの表れで、その点で考えると、社内で眠っている女性は国の平和を象徴していると言っている。

2014年3月、亡くなったイラストレーターの安西水丸さんは、雑誌「マリー・クレール」の1995年1月号（13ページ）で、上記のように語っていました。実際、日本以外の国でも、乗り物の中で居眠りをする人がいないとは言えませんが、日本とは比べものになりません。なぜ満員電車で、しかも立ったままでも、眠る人が多いのでしょうか。

少し考えてみると、睡眠不足や仕事の疲れに加えて、通勤時間も長く、その間、特に何かする必要もないからだと理解できます。そして、「日本は安全な国だ」という意見もよく聞きます。安西も言っているように、安全だからこそ、これほど多くの人が眠るというわけです。

たしかに、不安を感じないこと、安心していられることは、快適な眠りのための最大の要件です。日本は地震が多いなどにもかかわらず、安全な国だと思われます。

とはいえ、いくら治安がよいからといって、自動的に睡魔におそわれるという仕組みが人間にあるわけではありません。治安のよさと眠りにいかなる関係があるかは、さておき、安全論争は根強いのでこれを無視するわけにはいきませんでした。では、どのように人は安全と感じるのでしょうか？



図1 「なぜ満員電車で眠る人が多いのでしょうか」という問いにもう一つの答え
(京急電車の車内広告 2017年1月)

そこで、私は居眠りについて様々なメディアがどのように伝えているかを分析することにしました。どうして居眠りをするのかという理由だけでなく、自分は居眠りしないという人や、居眠りをする人を批判する理由にも注目しました。その結果、人前で眠ることを良しとしないのは、襲われたり、物を盗まれたりして危険だからという理由ではありませんでした。

むしろ、眠ってしまうと自分の身体のコントロールが効かなくなって、困ったことになるという恐れがあるので、居眠りを躊躇するのだ、と判明しました。鼾をかいたり、寝言を言ったり、口を開けて眠ってしまったり、あるいは座席から落ちてしまうといった恐れを抱くのです。これには羞恥心の問題だけではありません。周りからの批判が絡んでいます。その点を三井加寿恵氏（1990）も注意します。とりわけ女性の居眠りに対する批判はマナーやモラルの視点からも出てきています。女性誌 *an an* の1993年2月5日号（51ページ）の記事では女性にとって、みっともない行動として、読者からの意見が掲載されています。服飾メーカーの永田美恵さんの意見はその代表といえるものです。

電車の中で股を広げて熟睡している女性をよく見かける。おまけにロングヘアの場合、髪がカーテンのように、前に下がってとてもカッコ悪い。同性ながら、目のやり場に困ってしまう。やはり大人のイイ女は、人前で熟睡までするのはタブーでは。

メディアが（若い）女性の居眠りについて報じるとき、一番よく目にするのは、先ほどの例と同じで、まず、脚を広げて眠る、次に、長い髪が顔の前にかかっていて、乱れている、という2点です。



図2 「グラビア：娘たちの車内居眠り病」週刊新潮1995年12月14日号

「広げた脚」と「乱れた髪」

女性はきちんと脚を閉じているべきだという教えは何も日本に特有なわけでも、また理解しがたいわけでもありません。実際、ドイツにおける女性と男性の身体言語に関する研究を行ったマリアンネ・ヴェクス（Wex 1980：331）も同じ結論に達しています。ドイツのメディアも女性が脚を広げていることを一種の誘惑のポーズだとみなしています。それとは逆に男性が同じポーズを取ると、それは誇示する行動（ディスプレイ行動）だとみなされるのです（Molcho 1992：121-23も参照）。

一般的に言っても、日本の礼儀作法の本は、女性が立ったり座ったりしているときの膝や足先は男性の場合より、ぴったりとついていなければならないと教えています（岩下 2002：26-31）。私はこの点に注目して観察しましたが、電車の中で大きく脚を広げた女性をほとんど見かけたことはありません。それでも、とくにミニスカートををはいている女性の場合、わずかに脚を広げるだけでも、気になる風景がたまにあります。

それに対し男性は、混んでなければ、脚を広げて座っても、ほとんど批判の対象になりません。脚を広げて座ることで、椅子から転げ落ちないように身体を安定させることができます。男性、女性、ともに寄りかかることのできる、手摺のある端の席を好みます。

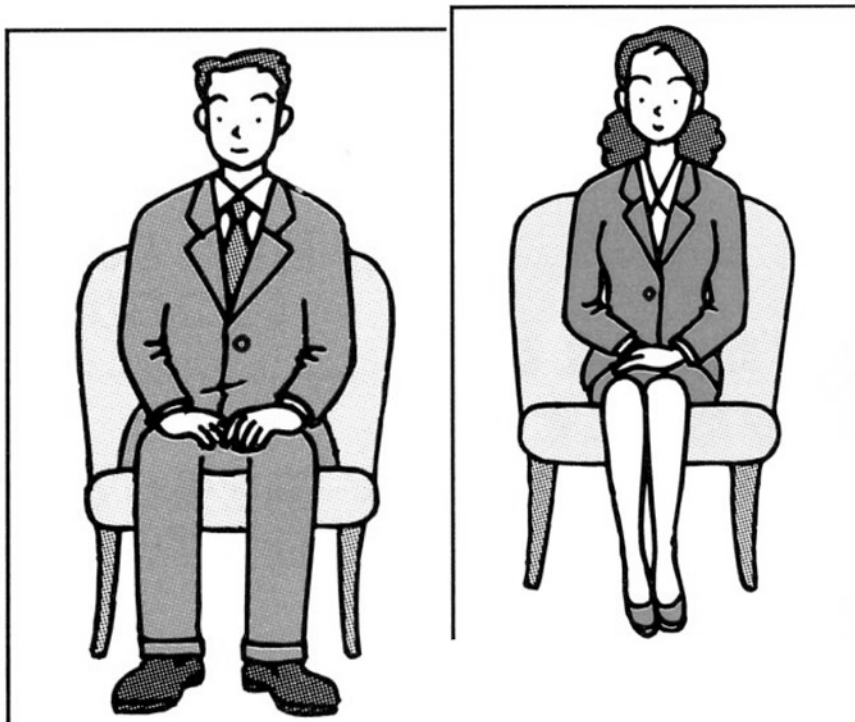


図3 足を広げる男性と膝を閉じる女性
（山田敏世監修『一歩先行くビジネスマナー』東京：永岡書店 2000年、112ページ）



図4 脚を広げて座っていることで身体を安定させる（写真：ブリギッテ・シテータ）

車内で居眠りしている女性の広いた膝に対する批判に加え、ボザボザの長い髪への批判が何度も出てくることには驚きました。いったいこの髪に対する強迫観念は何を意味するのか、長い間考えあぐねていました。そしてついに、以前行った早起きに関するあるインタビューの中に一つの説明を見出しました（Steger 2008 参照）。インタビューに応じてくれた40代の男性公務員は「朝寝坊」を「整えられていない髪」、「髭剃り前の顔」、「くだけた服装」と同じく、「だらしない」というカテゴリーに類別したのです。手入れを怠るような人は、自分の身だしなみすら管理できないので、信用できない、大事な仕事を任せられない、出世できない人です。というのが、その人の説明でした。

実は、そのような、髪の整えと社会的な行動規範の密接な関係は歴史的な資料を見ると、古代日本まで坂登って存在します。例えば、江戸時代の寺子屋の教科書ではこういうふうに載っています。

朝には早く起きて髪を削り、舅・姑につかふまつれ〔江戸時代の女性向けの教科書『女実語教』〕（黒川 1977：125）。

髪の毛を整えて自分の外見の印象をきちんと管理することは社会状況が提示するさまざまな要件と折り合う上での重要な尺度になっています。心理学では毛髪の状態はその人の霊的、精神的状態を反映し、（女性であれ男性であれ）その人の持つエネルギーと性的なヴァイタリティを象徴していると言われています（鞭 1993：188；荒俣 2000）。このシンボリズムが最も如実に表現されているのが日本の怪談（ホラー・ストーリー）でしょう。女性の妖怪や、山姥を含む恐ろしげな「老女」



図5 女性の長い髪は気になる（写真：ブリギッテ・シテーガ）

私たちは常に長くてもつれた髪の持ち主であります（Formanek 2005参照）。

私はある意味で毛髪へのイメージは第二次性徴としての（顕な）胸、つまり乳房と類似しているのではないかと考えています。女性の胸は、授乳という実的な機能を持つにも関わらず、男性の胸に比べ、はるかに性的な意味合いを持たされています。文脈にもよりますが、長い解けた髪と同様、顕な乳房は必ずしも官能的、あるいは淫らだとはみなされていません。たとえばヨーロッパの多くの海辺ではヌーデストビーチでなくても、ごく当たり前の風景となりつつあります。しかしながら、この点は銭湯とも似ているのですが、ヨーロッパでも裸の姿と付き合うための「礼儀的な無関心」のテクニク（ゴッフマン 1963）を作り上げてきました。じろじろと胸を見ることは致しません。それは暗黙のルールに反するからです。他方、じろじろと見られないためには、乳房は静止した状態でなければならないのです。

フランスの海辺で、女性の露出した乳房への男性の視線を社会的に観察したジャン・クロード・コフマンが述べているように、

乳房は静止した状態でない限り、さらしてはいけないようだ。[中略] いかなる無軌道な動きも見苦しく、醜いものとみなされる。ビーチを走ったり、歩いたり、飛びはねたりして、あるいは海の中で乳房をゆらゆらと揺らして泳いでいる女性は社会の厳格な性道徳を損ねてしまう。そうすると、「見て見ぬ振り」のおかげで守られていたはずの女性は、もはやその保護のうちはいられなくなるのである（Löwによる引用 2006：122）。



図6 京都の喫茶店で勉強中の10分ほどの居眠り—髪はキチンと整えて、身体のコントロールが素晴らしい（写真：ブリギッテ・シテェガ）

類比的に言えば、あらゆる方向に動く解けた髪もまた、揺れ動く乳房と同じように、ある人たちにとっては迷惑（あるいは性的誘惑）と捉えられるようです。「乱れた髪」と「乱れた性」との間にある含みは、[少し前まで取沙汰されていた] 現代版「山姥」にも反映されているかもしれません。実際は、彼女たちのヘアスタイルは無造作なものではなく、何時間も費やしてあのスタイルを決めているのです。

欧米人がやってくる前の日本では、裸でいるのとはまったく自然なことで、乳房が露出してても、それがエロティックだとはみなされていなかったと、よく耳にします。しかし、こうした見解の妥当性については多少の疑問があります。「あぶな絵」としてしられる浮世絵はしばしば女性の入浴シーンを描いているからです。その中で、女性たちは皆、胸をはだけ、あるいは着物の上半分を帯からたらしして身体を洗っている姿で描かれています。それでも、日本ではヨーロッパとは違って髪や項のほうが、はだけた乳房よりも官能的だと考えられてきたのは事実でしょう。今日ではみられなくなりましたが、30年頃前までの九州の農村では、女性が頭をしばって、胸をはだけた格好で農作業をする姿は日常的だったようです（ジョイ・ヘンドリとの個人的会話、2010年11月）。

したがって、公の場では、きちんと整えられた女性の長い髪はまったく問題ないのですが、居眠りしてその髪が顔の上に乱れ落ちると、それは性的な意味を含み、抑制のないエネルギーの表れと受け止められます。そのため、ほとんどの女性たちがきちんと座っているにも関わらず、女性の居眠りにはより厳しい目が注がれるのです。



図7 無防備な電車内の居眠り（写真：ブリギッテ・シテェガ）

電車の中での居眠りがどうして安全なのかという最初の問いに戻しましょう。居眠りが安全だと思われるのは、おそらく寝ている間、物を盗まれたり、危害を加えられたりする恐れがないからでしょうが、それだけではないと思います。それ以上に、日本人が安全と感じる最大の理由は、車内での居眠りが社会的に許容されているからであります。それでも、ある程度の身体のコントロールが、とくに女性の場合、要求されるのです。

さて、今まで話してきた電車の中の居眠りについてですが、これを安全論の視点から考察するだけでは不十分です。社会的な行為として、どんな意味があるか論じることが必要だと思います。

次に、電車内における居眠りに関する暗黙の社会的ルールを顕在化したいと思います。そのためには、以下の点を考察する必要があります。

- 1) 居眠りの社会学・理論的アプローチ：居眠りとは何か。
- 2) 電車という社会的状況。つまり、電車内とは、どういう社会的空間なのか。その中では、どういう振る舞いをするべきか。
- 3) 電車内における居眠りの機能。

1) 社会学・理論的アプローチ：居眠りとは何か

日本における眠りに関する研究を進めるうちに（Steger 2004）、次第に「寝床での眠り」と「居眠り」には概念的な違いがあることに気づくようになりました。社会的には「居眠り」は「眠り」

であるとは限らないということが明らかになったのです。「居眠り」の性格を正しく理解するには、その要素を分析することが重要になってくると思います。

日常の話し言葉では、「居眠り」という単語は微妙なニュアンスの違いで使い分けがされています。浅い眠りのことを「居眠り」と呼ぶ人もいれば、座ったままの眠り、短時間の眠り、あるいは主に公の場など、寝床以外の場所での眠りのことを指す人もいます。私はこの単語を文字通りに解釈すれば、その本質が見えてくると考えます。「居眠り」は、「居る」と「眠る」という単語を合わせた言葉です。つまり、「居ながらにして眠る」ということです。居眠りは生理的な特徴よりも、眠りの社会的な面を強調している言葉だと理解できるでしょう。電車で居眠りする人は、電車に居ながら（乗りながら）眠ります。会議で居眠りする人は、会議に居ながら（出席しながら）眠ります。言い換えれば、居眠りは「しながら活動」の一種なのです。

その意味で「居眠り」は寝床での夜の眠りだけではなく、ごろ寝、テレ寝、まどろみ、仮眠、シエスタ、昼寝やその他の「眠り」に関する表現とも区別されると言えます。

そういう居眠りをより深く理解できるには、アメリカの社会学者 アーヴィング・ゴッフマンが『*Behavior in public places*（集まりの構造）』の中で定義した概念が有効でしょう。ゴッフマンは次のように書いています。「あらゆる状況の共通の行動ルールは、すべての参加者がそれに適合するよう試みなければならないと思われる」。社会的、文化的な適応能力とは、「各状況にふさわしいことから」を知り、それ相応に行動することはその状況に「関与する」ことです（Goffman 1963 : 36-43）。

その「関与」は主観的ですので、第三者は、言語表現や外観、衣服、顔の表情、ボディールンゲージなどによって、どのような関与をすべきかを判断します。例えば、学校の授業では、制服を着て、髪の毛を整えて、静かに机を向いて、先生の話を聴いて、ノートを取るのが、文化的や社会的の正しい関与です。しかし、同じ人が週末にパンクロックのコンサートへ行くと、同じ格好をすれば、そのコンサートの状況にふさわしくないことになります。

ゴッフマンは、自分の関わり方が（彼の用語によれば）「主要関与」なのか「副次関与」なのか、それを仕分けする能力が人間にはあると断言しています。「主要関与は、その人の注目および関心の主要部分を吸収し、その人の現在の主要行動を決定する。それにたいして副次関与は、主要関与の維持を危険にしたり混乱させたりすることがなければ、その人が自由に実行できる活動である」と説明しています（Goffman 1963 : 43）。

つまり、そうした副次関与は「しながら活動」です。その「しながら活動」は主要関与と視られる行動を邪魔しないかぎりのものです。例えば、お風呂に入る時、歌を歌っても、身体を洗ったり、湯船に浸かったりなどの主要関与の邪魔にはなりません。私は電車などでの居眠りを「副次的関与」と考えます。なぜなら通常、居眠りは乗り物を利用する主な理由ではないからです。しかも、電車での居眠りは「移動」という目的を脅かすこともないのです。

ですから、居眠りは電車内において広く許容されます。しかし、そこでの「眠る姿」は重要なポイントです。つまり、見た目がその場の主要関与のマナーやルールに則しているかどうかが問題

になります。電車乗客のマナーに反していなければ、眠っていても、認められやすくなります。きちんと座って、口も膝も閉じていれば、批判はされません。鼾の場合は、その音は誰にとっても迷惑なので、受け入れられないのです。眠っている人は手足のコントロール同様、装い、化粧、髭剃り、髪型によって、その場に違和感を与えずに座っている必要があります。先ほど詳しく説明しましたように、一般的に、女性は男性よりも自分の身体に対するコントロールを要求されるゆえに、批判の対象ともなりやすいのです。

居眠りは副次的関与ですから、意識の一端は移動に向けられています。このことは眠っている乗客が自分に関係のある合図には気づいている点からも明らかです。大半の人たちは降車すべき駅が近づくと見事に目を覚まし、そこで降りて行きます。皆がみんなというわけではありませんが。



図8 中野駅「終点です！」(写真：ブリギッテ・シテガ)

2) 電車空間の社会的状況と視線の役割

社会的に見て、車内空間とはどのような社会的状況なのでしょう。言い換えれば、どのような空間でしょうか。都市社会学者の、磯村英一（1959）は都市空間を次の三つに類別しました。家庭などの「第一空間」、職場などの「第二空間」、そして街の広場、市場や公共交通機関などの「第三空間」という三つの空間です（田中による引用 2007：41）。

第一および第二空間でのコミュニケーションは、そこにいる他者とどのような関係にあるかという社会的な位置づけによって影響されます。これとは対照的に、人は電車を移動手段として利用するのであって、そこでの振る舞いが他者との関係に影響をもたらすとは考えません。ですから、家庭や職場では、周囲の人たちのことについてずっと気を使わなければなりません。それに対して、電車内のような、誰も知らない第三空間では自由に行動できると、磯村氏は説明しています。

とは言っても、決して電車の空間に何の規則も問題もないわけではありません。なぜならば、電車の中というのは、普通なら親密なパートナーとの仲でしか起きないような身体の接触が赤の他人と起きうる空間だからです（堀井 2009：104）。他者からの 接触、視線、音、臭いは邪魔になることがあります。それらによって自分のスペース、つまり、ゴッフマンがいう、「自己のテリトリー」が侵害されるからです（堀井 2009：108参照）。



図9 「自己のテリトリーを侵害されうる」 マナーポスター 1976・77年

元より、都市の交通手段と長距離列車にはさまざまな規制がありました。たとえば、1902年に発令された鉄道営業法第32条によると、次のような人たちは乗車を許されませんでした。酔っ払い[酩酊シタル者]、(伝染病の)病人[疾病アル者]、他の乗客を不快にするほど汚れた服装をした人[不潔ノ容装ヲ為シタル者]。さらに、悪臭[臭気]、かさばる手荷物、大声で歌ったり話したりすること[放歌喧騒]も、他の乗客に迷惑になるという理由で避けられなければなりませんでした。社会学者、田中大介が指摘するように、これらの規制は一伝染病の拡大に対する衛生上の予防策であることは別として一視覚を除くすべての感覚を扱っていることがわかります。他の感覚に比べ、視覚と眼差しはほとんど何の法的規制も受けていなかったのです（田中 2007：43-44）。

その理由は、視線を規制することは困難だからというものでしょう。しかしながらこの点は極め

て重要です。知らぬ人にじろじろと見られることは不快感や苛立ちの元となります（Freedman 2002：23, 41も参照）。



図10 「視覚は問題にならない」新京成電鉄のマナーポスター 2011年

ドイツの社会学者マルティーナ・レーヴ（Martina Löw）は次のように解釈しています。

何にもまして簡単に境界を越え、他人の空間の中に自分の空間を拡張するのは、この視線である。[……] 私たちが自身の空間を築き上げるとき、私たちは異質な対象物を見ない振りをするか、またはそれらを自分の空間の境界を印すために利用する。[……] このプロセスは視線のテクニックをととして社会的に監視されている。身体は空間によって保護されているが、同時に、これら境界空間は侵入者を招き寄せる（Löw 2006：124）。

マルティーナ・レーヴが、このように述べているように、視線には二つの働きがあります。第一に、人は視線によって誰かの境界線を征服することができます。つまり、視線には、回りを威嚇したり、監視してるぞ、という役割があります。それで、視線によって自分のテリトリー（領域）を守ります。

第二に、「人は視線から自分を守る手段として周囲を睨みかえす、という方法」を採ります（Löw 2006：127）。つまり、居眠りによって、視線を遮ることで、周りに敵意がないことを示したり、周りの視線を無視することができます。

同じ空間に他者が存在することを認識はするが、次の瞬間にはさっと関心を引っ込めることで、他者に特別な敵意や好奇心を抱いていないことを伝えます。自分が相手にとって脅威を与えるものではないことを知らせるためには、「礼儀的無関心」(civil inattention) というテクニックが編み出され、学ばなければならなかった、とゴッフマンは述べています (Goffman 1963 : 84)。

このようなことから、法規制が視線に関しては、うるさくなかったとはいえ、乗客の私密的な空間を侵害し合うことのないよう視線を逸らすいくつかの手段が講じられたとしても、驚くには及びません。その一つが車内空間自体を読書空間とすることです。明治初期の日本人はすでに熱心な読者でした。しかし、一つ問題がありました。それまでには音読の習慣があったのです。電車内で黙読することに慣れるまでには相当の訓練を必要としました。そして、特に通勤客のために、あらゆる形式の本や新聞が開発されました (文庫本や座談会形式の読み物などがその例です)。各新聞社は通勤客が乗車前に買うことができるようにと、新聞の販売時刻を朝と夕のラッシュ時間帯に合わせました。乗客が電車に持ち込む本や雑誌のほか、1920年ごろには車内広告 (車室の中で読める公告や広告) が盛んに掲示されるようになったのです (もちろんこうした公告/広告は消費文化を奨励し、乗客の行動を管理・指導するためのものでもあります)。この場合も、他の乗客の迷惑にならないように黙読されねばなりませんでした。このように「視線の管理」 (management of the gaze) は、電車の中に公共空間をいかに創り出すかという点で重要な役割を果たしたのです (田中 2007 : 45)。



図11 「視線の管理」は必要 (写真：スベン・パリス)

最近では携帯電話やスマホが新しい規制の筆頭に位置しています。車内での通話は差し控えるべきですが、メールの送受信、携帯用ゲーム、インターネット検索であれば携帯電話を使用してもいい、というものです。このように本やポスターと同じく、携帯電話は目を逸らし、空いた時間を最大限に利用するために用いられています。

一方、通話は、その際に発せられる声だけが迷惑になるわけではありません。聞きたくもないプライベートな会話、一方通行の会話を聞かされることにもなるので、他の乗客には迷惑なのです。

車内空間はそうした間接的な方法によっても管理されていますが、少なくとも1970年代以降、東京の鉄道会社各社は「マナー・ポスター」と呼ばれる、公共交通機関での適切な行動を促すための公告を考案してきました（堀井 2009：92-100）。

視線とジェンダー

先に、メディアが居眠りに関する批判する場合、男女の区別があると述べました。したがって、視線とジェンダーの公共での諸関係は電車の中で取り決められる一つの重要な課題としても考察に値するものです。中でも際立つのは、男性が「見る主体」であるのに対し、女性は「見られる対象」とであるという点です（Janet Wolff 1985）。田山花袋の『少女病』（1907年）がその例の一つですが、大正時代の文学では、男性の作家がある男性が女性を観察することを描写しています（Freedman 2011：20）。その裏には男女の権力の関係があります。見られる性としての女性は適切な行動を示すことを要求されます。膝がきちんと閉じられているか、髪の毛はきちんと整えられているか、が公共の関心事となります。

最近のマナー・ポスターは視線とジェンダー特有な問題を提示しています。電車の中で化粧をする若い女性たちに対する感情的な批判がそれです。相談サイトの「はてな」で「なぜ電車で化粧をしてはいけないのでしょうか。納得できる理由をおしえてください」という問いに対し、何人かが答えていました。例えば、あるブロガーは「それは、電車の中で着替えをしない理由と一緒にですね。羞恥心がなくなって、そのうち、着替えする人も出てくるんじゃないかと心配です（^_^）」と回答していました（<http://q.hatena.ne.jp/1076585879>）。

つまり、車内で化粧をする若い女性たちは「裸同然」のプライベートな自分を他人の視線から守ろうとはしません。しかも、それだけではありません。彼女たちは批判を無視することによって、ある意味で見られる対象としてのルールを蹴飛ばして車内の公共空間を規定し直し、自分たちの私的空間にするという権力を発揮しているわけです。

さらには、彼女たちにとって、見てる人がそこにも社会的には存在していないというメッセージを発しているのです。「はてな」で回答した別のブロガーは次のように指摘していました。

衆人環視のもとで化粧をする、それはちょうどヨーロッパの王侯貴族が召使の目の前で何のためらいもなく用を足すのと同じなのです。あたかも「私はあなたに見られていても、これっぽちも恥ずかしくないわよ」と言っているようなものです。



図12 「家でやろう」東京メトロのマナーポスター 2008年

このブロガーが述べているように、その意味で、公衆の面前化粧をする若い女性たちは、既存の社会秩序と権力関係、つまりジェンダーと年齢の両方の権力関係を脅かしていると言えます。男性乗客は、社会階層の頂上にあつたとしてもその権威はもはやなく、あるいは男性としての性的なアイデンティティも失せているということです。男性、そして年輩の女性にとってこの事実是不愉快であるばかりか、「覗き魔」扱いを受けることにもなり、より気分を害するようです。

まさしくそこに「居眠り」が入り込む余地があるのです。

3) 電車内における居眠りの機能：「魔法のマント」としての居眠り

近接した視線が人を困惑させ、他人の空間を侵害するのであれば、他人の目を避けることでこうした状況を耐えられるものにすることができます。みっともないこと、つまり恥ずかしくて見せられないことは見たくもないのです。目を閉じれば、他人の境界線破りを見ることもないからです。それは自分自身の空間を守る一つの方法であって、「礼儀的無関心」というテクニックでもあります。目を閉じることは、読み物や携帯電話で暇つぶしをするより、もっと簡単で効果的です。

しかも、眠りは人を社会的な絆や要請から解放してくれます (Schwartz 1973 : 20参照)。一種の内面移動あるいは遊離でもあります。実際に眠っているのか、単に目を閉じているだけなのかの違いは、さほど問題ではありません。ですから、本当に眠っているわけではないという人が多いからと言って驚くに値しません。彼らは精神的にも身体的にも社会的にもリラックスするために目を閉じているだけなのです。

場合によっては、眠った振りをすることもあります。よく知られているように、「狸寝入り」という表現は眠りを装うことを指します。日本の民話によると、狸は評判のいたずら好きで、変装や

変身の達人です。こうした居眠り、ことに眠りの偽装という居眠りの社会的側面に私が付けた名前は「社会的な魔法のマント」です。例えば、ハリーポッターも「マント」をかぶって、透明になるそうです。それと似たように、居眠りは人が社会的に変装するのを助けてくれます。そうすれば社会的責任をフルに負うこともなくなるからです。

「社会的な魔法のマント」としての居眠りは酒に酔った状態に似ています。多少のビールや酒は気を緩ませ、気楽に言い寄る気分させることはよく知られています（Allison 1994：122-123に参照）。ナンパに行く前、景気付けに酒を飲む人は多いでしょう。また、酒の席での無礼講として、仕事帰りにちょっと一杯やったサラリーマンが、ある程度、酔った勢いで後々のことを考えず上司の批判をすることも知られています。「こうした行動は酔っ払った人間ではなく、アルコールの所為だとみなされる」のです（Smith 1992：147）。アルコールを摂取するという社会的行為は、飲んだ人を特殊な社会的位置に置くことになります。それは必ずしもアルコール自体に起因する効果ではありません。ですから、どの程度酔っているかはあまり関係ありません。アルコール摂取は、しかしながら、複雑な問題です。飲み会で言いたい放題話した後、すべてが本当に許され、忘れられると信じるのはナイーヴに過ぎるでしょう。違いはその日にはわからないでしょうが、「無礼講」を文字通りに受け取って自由に上司の批判をした人は出世組の中にはいないことを社員たちは知っているはず。その結果、彼らは羽目をはずしたかのように振舞うだけなのです（住原則也との個人的会話、2003年8月30日）。率直さと社会的抑制との間の適切なバランスを見つけることは大い

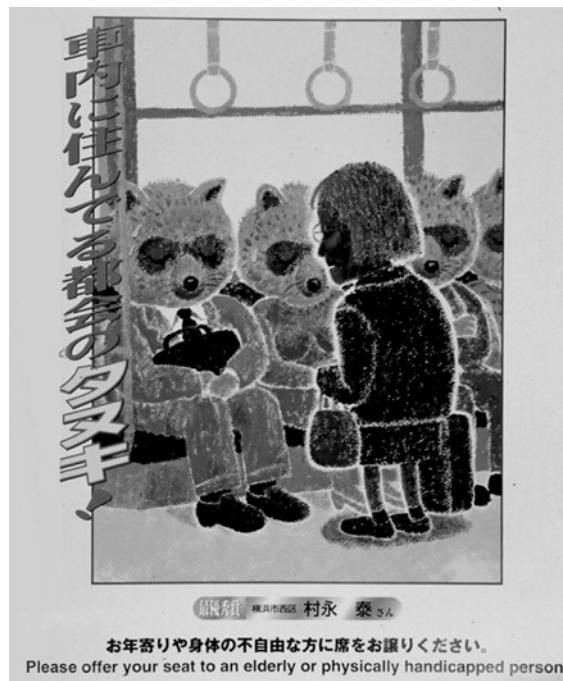


図13 「お年寄りや身体の不自由な方に席を譲りください」営団地下鉄（現東京メトロ）の
マナーポスター・コンテストで優勝したポスター 1996年

に文化的適性を要することです。もちろん、酔っぱらってもある程度、気を使わなければなりませんが、酔ってこそ、日中には誰も触れない矛盾などについて話せるというものです。

言うまでもないですが、居眠りは酔っぱらいと少し異なる機能をもっています。一般的に言って、睡眠中の人は強引ではありません。しかし、乗り物での狸寝入りを「魔法のマント」として利用し、座席の確保する人は少なくないと見てよいでしょう。

「シルバーシート」（高齢者優先席）は1973年に始まって以来、徐々に導入・拡大され（堀井2009：8）、都市近郊の電車では妊娠中の女性と高齢者、そしてハンディキャップのある方たちに席を譲ることが奨励されています。匿名性の高い車両では、多少の無作法は許容されるとは言え、まったく問題がないわけではありません。しかし一旦目を閉じれば、その人は社会的には存在しなくなります。そうして社会的に「透明」の存在となることによって、初めから衝突を避ける事が出来ます。乗客はこのメカニズムを日常的解釈の中で、すでに把握しています。それでも、眠っている人を起こすのは気が引けるし、その人が本当に眠っているか否かを確認できないので、結局は居眠りしている人をそっとそのままにしておくのです。

居眠りはもう一つの意味で魔法のマントになっています。軽く一杯やった男性がその勢いで女性を口説くように、車内で眠っている人が隣の乗客の肩にもたれかかる場面はしばしば見受けられます。私はたくさんの居眠り客を見てきましたが、ほとんどの人はそうしたことをしないよう注意を払っています。

できるだけ端の方の席を取る、あるいは頭を前方に傾けるなどして、寄りかからないようにしているのです。神戸、大阪と京都を結ぶ阪急線の夕刻の電車では（ロマンチック・シートと呼ばれるほど狭い）二人がけの座席で、たいてい、居眠りしています。ほとんどの男性乗客は通路側〔あるいは窓側〕に身を傾けて身体の接触を避けています。しかし、一般に、となりの人にもたれる人



図14 阪急電車のロマンチック・シート 1995年（写真：ブリギッテ・シテーガ）

もすくなくありません。

一方、寄りかかられた側の許容程度はさまざまです。席を立つ人もいれば、頭を押しつける人もいます。ただし誰が、どのように寄りかかるかにもよります。

ある男性（kuruyoku）の書いたブログで2012年4月16日に「女に隠している男の本音」という記事があります。その第一に、「電車で隣で居眠りしてる女が自分の肩に頭を乗っけてくるととても嬉しい」と書かれています（<http://hydrogenblr.tumblr.com/post/21204079042/1-2>）。

枕代わりにされた人の最も一般的な反応は、あるブログを代表として引用すれば、「女の人や学生、男の人でもそれなりに清潔感のある人なら少しくらい寄りかかられても気にしないです。あぶらぎったおっさんなら、席を立ちますが」というものです（ノノ、2006年8月12日：<http://komachiyomiuri.co.jp/t/2006/0809/098780.htm?o=0&p=1>）。中年の男性（おやじ）がとくに嫌われる理由は、彼らが若い女性の肩にもたれかかることを好んでいるように見えるからです。実は、私は何人かの中年以上の男性からこのような行動を取ったことへの罪悪感を告白されたことがあります（コメディアン志村けんと加藤茶の動画は、その気持ちを伝えます。動画リンク<https://www.youtube.com/watch?v=SdfdwM0BbA4>）。

こうしたセクハラは日本で、明治末期までさかのぼります。20世紀初頭、サラリーマンや男子学生たちは通学電車の中で女子中学生に触れることを狙って近づき、女子学生が嫌がるのを「遊戯」の一つにしていました。男性学生が電車で女子学生への嫌がらせを互いに競い合うことを「トレノロジー（trainology）」と呼んでいました。そういうことから、若い女性を守るため、1911年に、「花電車」という「婦人専用電車」が登場しました（田中 2007：46-47；Freedman 2011：56-57）。

1980年末以降、性的嫌がらせは排斥されるようになりましたが、「狸寝入り」という方法によって、この「遊び」に耽ることは可能ではないでしょうか。狸寝入りして、若い女性の肩にもたれかかるのは罰せられることの減多にないセクシュアル・ハラスメントの一種なのですが。

酔っていると思わせるには、ほんの一口、二口のアルコールで十分です。同様に、その人が本当に眠っているのか、あるいはただ目を閉じているのかはあまり問題になりません。行儀が悪いのは飲んだ人の仕業ではなく、アルコールの仕業だとする考えと同じ様に、身体のセルフコントロールを失くすのは眠っている人の仕業ではなく、眠りの仕業だということです。「魔法のマント」を身につけることで、ある程度までは、日常の社会生活で許されないことをするのが可能になるわけです。

眠った振りをした人に対する社会の目は徐々に厳しくなっています。「ある許容範囲」を超えると、居眠りそのものが批判の対象となります。マナー・ポスターの中には、隣の人に寄りかからないように注意しましょう、という男性乗客への呼びかけもあります。とくに電車内でのセクハラに関する議論と、罰則の導入は状況のある程度変えたと言えるでしょう。多くの中年男性は不安に駆られ、他の乗客の空間を侵害しないように気をつけています。

最近では、うっかり女性の身体に触れることのないよう、痴漢と間違えられないように、両手を吊り革に掛け、たとえ疲れているときでも、乗車している間中、常に手が頭上にあるように努めて

いる男性もいるそうです。ほとんどの乗客はできる限り身体の接触を避けようと心がけています。そのせいでしょうか、最近には、電車に乗る度に、むしろ女性が平気で、頭をとりの人の方に寄せて眠っている風景を見かけるような気がしました。気のせいでしょうか。



図15 フィールドワーク中の著者 2006年（写真：リン・ホッフマン）

他方では、「電車」「居眠り」「痴漢」をグーグルで検索すると、数百項目にも上るポルノグラフィックなビデオにヒットします。そうしたビデオには中高生の制服を着た女の子がしばしば登場します。寝たふりした男性だけではなく、女の子が居眠りして、自分の身体を防ぐコントロールができないため、痴漢の犠牲者になるシーンのほうが多いかもしれません。そういうことがあっても女性が居眠りすると、セクハラを招いているようで、カッコ悪いと思われることもあるでしょう。

日本社会に関する結論は？

「居眠り」の許容範囲の変化は、男性のアイデンティティと男らしさの概念に起きた、より一般的な変化を反映していると言えると思います。

「トレノロジー」や居眠りしている女性のポルノグラフィックな描写は、近代、ことに戦後の性的役割を通したジェンダーの関係やジェンダーアイデンティティがつくられてきたことを示しています。

つまり、男性は生産労働（すなわち経済的な役割）と性における能動的な役割を自らのアイデンティティとしてきました。これに対し女性は再生産労働という役割を割り振られ、依存的かつ受動

ので、性（セックス）においては無垢で、保護されねばならない存在とされたのです。

レーヴが著したとおり「セクシュアライゼーション」が単に欲望だけでなく、性における権力の地位の表現であるという事実」（Löw 2006：127）を考えると、女子学生や眠っている女性を扱ったポルノグラフィはジェンダーの不均衡な関係と「男らしさ・男性性・マスキニティー」の問題を反映しているように思えます。

しかし、その性別役割分担は変わりつつあります。高学歴の女性の中には仕事や社会的な地位を求める人も多くなりました。結婚して、子供をつくって、子育てのために仕事をやめるという固定観念にしばられない女性も増えました。

サラリーマンは戦後の経済的成長と安定の屋台骨としての役割を担い続け、長い間、男らしさの支配的モデルでもあり続けました。しかし、1990年代初頭に始まった経済不況以来、多くの男性はその役割を果たすことにますます困難を感じるようになりました。勤務する会社から余剰人員扱いされたり、そもそも卒業後にまともな就職先を確保できなかったりという場合だと、なおのことそうでしょう。これらの変化は社会の支柱としての男性の役割に疑問を投げかけるばかりか、彼らの存在自体に対する生理的な反発も生じさせています。男性性＝男らしさに関する言説の変化はセクシュアル・ハラスメントに関する言説や、2000年に導入された女性専用車両、さらに経済危機の所為で安全・安心感が損なわれたという一般的な状況などと関連していると思われます。

女性専用車両を利用する理由に関する調査で、女性たちは男性の視線から逃れて清々すると答えています。このことは「男性の存在が女性の行動の規制や制限となっていて、反対に、男性の不在は女性にとって、そうした制限からの解放となる」ことを示しています。さらに女性たちからよく聞く不満は、男性の身体的存在そのものです。それは情けないと言えば情けない、いやらしい「おやじ」を連想させ、とくに若い女性に嫌われる原因となっています（堀井 2009：157-161）。したがって、権力関係はジェンダーに関わるだけでなく、年齢もまた重要なカテゴリーとなっているのです。最近の電車に関する規則の変化には、ジェンダーと年齢の権力関係が映し出されていると言えるでしょう。

結 論

居眠りの存在理由を、夜の睡眠不足を補うことや「日本は安全な国だ」ということだけでは、十分に説明できません。これらの要素の他に「視線の管理」をし、公共の乗り物の中で私的空間を確保するための重要な「礼儀的テクニック」でもあるのです。

居眠りをしながらの活動、つまり、電車で居ながら（電車に乗りながら）眠るとして解釈すれば、居眠りの社会的ルールや社会的機能を理解できると思います。ゴッフマンの「副次関与」という概念として見られることで、マナーが「主要関与」（電車に乗ること）に適応するマナーであります。電車内の第三空間は地位・身分・教養が問題にされなくても、ジェンダーや年齢ごとに差異があります。

特に、女性の広げた脚や乱れた髪、そして化粧するのは問題とされます。それは、女性がスケベ

な男性の目で「見られる対象」であるからです。そのため、特に礼儀正しい態度でなければなりません。見る主体の男性もマナーを守らなければなりません、彼らは、狸寝入りの方法を使って、つまり、社会的「魔法のマント」を被ってある程度、非難を免れることができます。もちろん、ある程度は女性もそうですが。

実際、「見る主体」の男性と「見られる対象」の女性との間の関係は性欲の関係というよりも、権力の関係を表しています。

居眠りの行動と視線の管理を考察することで、最近の男女関係やジェンダーアイデンティティの変容も明らかになります。不景気の中、代表的なサラリーマンのマスクリニティー（男性性）がしばしば壊されてしまいます。しかしながら、電車の痴漢ビデオなどの人気を考えると、ファンタジー上ではまだこうしたジェンダーイメージを守ろうとしているのではないかと思います。

参考文献

- ・ 荒俣宏 (2000年)『髪文化史』東京：瀬出版社
- ・ anan (1993年)「大人の女の常識。あなたは大丈夫？ カッコ悪い、恥ずかしい、常識知らずの女たち」『anan』858、2月5日号、48-51頁
- ・ 安西水丸 (1995年)「女の仕種1：眠る」『マリー・クレール』1月、13頁
- ・ 磯村栄一 (1959年)『都市社会学研究』東京：有斐閣
- ・ 岩下宣子 (2002年)『すぐに役立つマナー辞典』東京：ナツメ社
- ・ 大久保孝治 (2008年)『日常生活の社会学』東京：学文社
- ・ 小勝健一 (2010年)『車掌の口、乗客の耳：車内放送のメディア文化史』北海道大学 (<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/42945Ogatsu>)
- ・ 黒川真道 (1977年編)『日本教育文庫9：教科書篇』東京：日本図書センター
- ・ 週刊新潮 (1995年)「娘たちの車内居眠り病」『週刊新潮』12月14日号、11-15頁
- ・ 多田道太郎 (1972年)『仕草の日本文化』東京：ちくま書房
- ・ 田中大介 (2007年)「車内空間の身体技法—戦前期・電車交通における〈猥雑さ〉と『公共性』」『社会学評論』58 (1)、40-56頁
- ・ 田山花袋 (1993年)「少女病」『定本花袋全集1』京都：臨川書店
- ・ 野口芳宏 (2006年)『小学生までに身につけるこどもの作法』東京：PHP研究所
- ・ 堀井光俊 (2009年)『女性専用車両の社会学』東京：秀明出版会
- ・ 三井加寿恵 (1991年)「電車の中の居眠りについて：日本人のしつけ意識の考察」『飯山論叢 (東京工芸大学)』8 (1)、231-315頁
- ・ 鞭羊子 (1993年)『夢と眠りの使用法、もっと自分が好きになる』東京：同文書院
- ・ Allison, Anne 1994 : *Nightwork. Sexuality, Pleasure, and Corporate Masculinity in a Tokyo Hostess Club*. Chicago and London : The University of Chicago Press.
- ・ Burgess, Adam and Horii Mitsutoshi 2012 : “Constructing Sexual Risk : ‘Chikan’, Collapsing Male Authority and the Emergence of Women-Only Train Carriages in Japan”, *Health, Risk & Society* 14 (1), 41-55.
- ・ Dasgupta, Romit 2003 : “Creating Corporate Warriors : The ‘Salaryman’ and Masculinity in Japan”, in Kam Louie and Morris Low (eds.), *Asian Masculinities : The Meaning and Practice of Manhood in China and Japan*. London : Routledge, 118-134.

- Formanek, Susanne 2005 : *Die 'böse Alte' als Standardfigur der japanischen Populärkultur der Edo-Zeit. Die Feindvalenz und ihr soziales Umfeld* (Beiträge zur Kultur- und Geistesgeschichte Asiens 47). Vienna : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Freedman, Alisa 2002 : "Commuting Gazes : Schoolgirls, Salarymen and Electric Trains in Tokyo", *The Journal of Transport History* 23/1, 23-36.
- Goffman, Erving 1963 : *Behavior in Public Places. Notes on the Social Organisation of Gatherings*. New York and London : The Free Press/Macmillan.
- Löw, Martina 2006 : "The Social Construction of Space and Gender", *European Journal of Women's Studies* 13 (2), 119-133.
- Molcho, Samy 1998 : *Körpersprache*. München : Mosaik.
- Schwartz, Barry 1973 : "Notes on the Sociology of Sleep", in Arnold Birenbaum and Edward Sangrin (eds.), *People in Places. The Sociology of the Familiar*. London : Nelson, 18-34.
- Smith, Stephen R. 1992 : "Drinking Etiquette in a Changing Beverage Market", in Joseph J. Tobin (ed.), *Re-Made in Japan. Everyday Life and Consumer Taste in a Changing Society*. New Haven and London : Yale University Press, 143-158.
- Steger, Brigitte and Angelika Koch 2013 : *Manga Girl Seeks Herbivore Boy. Studying Japanese Gender at Cambridge*. Zurich : LIT.
- Wex, Marianne 1980 : *'Weibliche' und 'männliche' Körpersprache als Folge patriarchalischer Machtverhältnisse* (2nd edition). Frankfurt : Verlag Marianne Wex/Frauenliteraturvertrieb.
- Wolff, Janet 1985 : "The Invisible Flâneuse. Women and the Literature of Modernity", *Theory, Culture and Society* 2/3, 37-46.